

## 書 評

### 講演集『遠い航跡』

濱里 忠宜著

(南方新社 2013年5月刊 281頁)

---

松 井 春 満

本誌上に、濱里さん（研究誌上では姓のみで記すべきであろうが、それでは筆が進まないの、さん付けを許していただきたい）の著作の評を載せていただくのは実は二度目である。同期の学友として、京都で学びを共にして以来の縁のゆえであろう。今回は、七冊に及ぶ著作の中でも、彼の中にかねてより胚胎していた或る思想的関心に、集中的な展開を見せたと思われる『斜光の風景』であった。そして今回は、彼の絶筆ともいえる『遠い航跡』。これは文字通り、成人期以来、教育の世界を歩んできた彼の足跡、航跡に残る、珠玉のような邂逅（出会い）の数々を振り返り、生きることに関わるその意味についての思索を述べた講演録である。

濱里さんが、語る話も書く文も、心が洗われるような感動を呼び、誰しもが、人としての生き方を教えられる思いがすることはよく知られているが、その中でも時期を画する二つの書の評を担うことになろうとは、私はその巡りの不思議ということをおぼえずにはいられない。

もっとも当初は、これが絶筆の著作になるとは想像もしなかった。依頼を受けて後に、入院されたのである。遠隔地であり、また私の鈍感さのゆえに、健康に著しい不調をきたしておられることに気づけなかったのは、まことに不覚であった。

濱里さんは、忽然と視界から消えてしまった。しかしいかなる信仰の

立場にあっても、彼の姿を思い出し、言葉を振り返り、心において語り合うことはできる。そういえば、教育者である濱里さんは、「よき教育とはよき思い出となるもの」としばしば語っていた。それは彼の著作の中に散見される言葉でもある。

ここでも、既に思い出となった交流の歴史を振り返り、彼と対話をしているような積もりで、この書評の文を記すことにしたい。

(1)

前回にも触れたことであるが、大学で哲学を専攻した濱里さんは、学部卒業後、直ぐ郷里へ帰って高校教員になった。若者を育てる仕事に携わること。哲学青年なればこそ、この仕事は、その資質にまこと相応しい意味をもち、人間について、学びについて、語りについて、そして人生そのものについて、生きた哲学的思考を重ねる場を与えてくれることになったと思う。それはアカデミズムの世界で学者の道を歩んだ者には、却って見ることの稀な生き方といって良い。私は濱里さんの著作を読むたびに、ここにこそ真の「philosophieren（哲学する）」の姿があると思ったものである。

学生時代から読書家であった。哲学書を読み、文学に親しみ、安酒を飲み、よく議論をし、時世の歪みに悲憤慷慨し、友情に厚く、義を重んじ、そして浪漫派であった。感性が豊かで、ものごとに感動することも多かった。今日から見ればむしろ狭い体験世界を通して、彼は感性を明敏にし、ものごとを深く考えるという学び方をしていたのだと思う。そこに培われた資質と行動は、恐らく現場の教員生活においても、基本的に、彼の人となりを醸すものになっていたのではないだろうか。それは広いというよりも、むしろ質の深い、教養人フマニストの生き方ということである。

今は大学の様相も変わってきているが、かつて（高度成長期以前）は、戦後においてさえドイツ哲学をまず学ぼうとする者が多かった。濱里さんも私などもその一人であるが、世に出てからの濱里さんの著作を読むと、ギリシア古典と並んで、フランス哲学への視野が大きく広がっている。とくにフランス・モラリストの哲学、ジュベールやラ・ロシュフコーなどは彼の愛読書と言ってもよい。人間を真正面から見て論ずるだ

けでなく、常とは異なる角度から、多角的に見てみようとする余裕の哲学、清濁併せ呑みつつ、寛やかに王道を模索する哲学的人間観である。そしてそれら哲学者の書のほかに、瀨里さんは、日常の交流の中でまみえることの出来た人の姿と言葉からも、意外に深き学びを引き出してくれる。あの思春期の哲学青年が、人々にあまたの実りをもたらしてくれる大樹となったのである。その実りは、耳を傾ければ、聴く者の心の奥所<sup>おくど</sup>に染み透り、自ずから、生きてゆくことの「落<sup>みお</sup>」となる言葉として紡ぎだされた実りである。その最終版となった今回の著作、その素材の多くは既に彼の持論に含まれているものではあるが、新しい文脈の中でのその語りに耳を傾けてみよう。

## (2)

まず、著者が「わが自省録」とも呼ぶ本書の序文で述べる言葉に注目したい。

「人は悔いつつ、惑いつつ生きている。しかし私たちは、じつは、その思いを秘めて新しい朝へ向かわねばならぬよう生かされている、いのちなのである」と。そして続くくだりで、「目を凝らせば、どんな凡庸な人生にも、どんな悲しい人生にも、失敗という人生はない。人はどんなに老いゆこうとも生き直すことができるのであり、人間とは、つねに人間になりつつある存在なのである。」と述べられている。

人間を優しく、しかも鋭い目で、大きく包みきった言葉である。これを甘いというだろうか。そうではなくて、人生を歩む過程で、折に触れて人に自省を促しつつ、いかなる人にも決して希望を失わせることのない言葉、その意味では、宗教的とも言える人間観に裏付けられた言葉であると私は思う。

私は、よく知られた歴史上の或る宗教者の姿を思い浮かべる。著者が内に抱く人間観とよく似ているのである。著者瀨里さんは、このような心を以て、教師として生徒たちと接し、また教育行政の要職を担ってこられた。教育の現場や行政職に彼のような思考の教師がうんと殖えれば、人間を育てる場としての学校教育が随分良くなるのに、と思ったものである。ある年、鶴丸高校出身の新入生が、現役時代の私の研究室へ来て、目を輝かせながら、瀨里校長先生の話をしてくれたことを思い出

す。平素学校で出会う校長先生の姿と言葉が生徒の心に焼き付き、沁み透っているのであった。

(3)

濱里さんの思考は単に「哲学」と呼ぶより、むしろ「教育哲学」と呼ぶ方が適切であろう。本書でその全体は、人と人との、また人と書物との「出会いの問題」を基軸にして展開されている。その思索の底では、人生は「出会い」と「別れ」が連続する旅のようなものであり、「進み者は必ず別れねばならない」という、人生の不条理をこの世の条理として受け止める哀しみが、通奏低音をなしていると言ってよい。

実例を紐解きつつ語る著者独特の手法で、例えばホトトギス派の俳人である、著者の中学・高校時代の恩師と教え子の例、西郷南洲と著者の祖父との例、京都大学総長とその中学時代の恩師との例、さらに、濱里さんと懇意である作家、椋鳩十氏自身の体験談など、感動的な出会いの記録と、これを紐解いた意味が紹介されているが、ここでは、濱里さんの語る、その良き出会いの論理について筆を進めてみよう。

人間は、一人一人が掛け替えのない「代理不可能」な存在である。が同時に、すべての人が「光と闇」の二重性を持ち、それゆえに惑うこと多い存在なのである。そのような人間が、親や教師の立場に立つときには、何よりも、相手を知り、そして自分を知ることがなければならない。「いのち」である人間同士が出会うのである。自己を知るとは、自己もまだ「未完成な存在」だと自覚することであり、そのような自己に、しかも相手の苦しみや痛みが見え、相手を理解しなければならないのである。それが教育の務めであり、相手が見えるようになるためには「豊かな想像力」を培うこと、感性を豊かにすること、それが導く側の人間の必須要件であるという。

人と人々が、心に響くような出会いを体験したときには、それは決して偶然の出来事ではなく、そこに言いしれぬ必然的なものが働いているように感じられるものである。それは「いのちが呼応する」ような体験であり、それゆえに、その主体に大きな影響を与える力を持つのである。著者は、これを難しい言葉とことわりつつ「実存的邂逅 (existentielle Begegnung)」と言うとも述べている。近世の実存哲学で、精神の覚醒

(めざめ)と関連する問題として重視される概念なので、ここではもう少しその意味と由来について説明を加えられた方が良かったかもしれないと思うが、しかし講演の中でのことなので致し方がないのであろう。

さらに、「子どもという〈いのち〉に向き合う、私たちおとなの視線はどうなければならないか」と著者は問いかける。「大人にとって、その〈人間力〉とは、どれほど相手の立場に立つことができるか、相手をどれだけ認め、受容することができるかという、その容量の大きさ、深さ、言葉をかえれば〈出会いの力〉だろう」。「子どもの持っているものをどれだけ認め、そしてその潜在する力をどれほど引き出し、ほめてやれるかという、その対話力こそが、親や教師の人間力というか、人生の実力というものだろう」と著者は語っている。

これを読んで、私は心底はっとした。私自身が小学五年生のとき、担任の先生に、子どもなりの危機的心理状態から救われた体験を持つからである。担任の前で、ある事柄について嘘を申告したとき、家庭事情が背景にある私の嘘を見抜かれたに違いない先生は、鋭くて、かつ寛やか温情によって、咎めることなく逃げ場を与えて下さったのである。そのときもし追求されていたら、辻褄を合わせるために、私は敢えて非行を犯す積もりであった。子ども心の他愛ない事ではあるが、本人にとっては真剣な事柄。この私の心の葛藤を洞察して、包みとって下さった担任の大きな包容力のお陰で、私は二度と同じ過ちを繰り返すまいと心に決め、その後をまともに送ることが出来たのである。児童期の鮮烈な記憶として残っている体験であり、この先生を私は生涯の恩人と今も思い続けている。後になって私は、既に故人となられたこの先生は、子どものもつ心の闇までを理解し、自分の中にも、人間として同じものがあると自覚する、どこか宗教的な謙虚さを持っておられたのではないか、だから私を追い詰められなかったのだろうと考えるようになっていた。私事ではあるが、もう一言つけ加えると、この回想を後に或る教育誌に詳しく書いた所、現場の先生からの二つの反応が返ってきた。一つは、担任の行動について、教師として甘すぎると見る反応であり、もう一つは、これこそ本当の人間教育だとして、担任を高く評価する反応であった。

私自身はこの担任の先生に、濱里さんの語る人間力ある教師の一つの

範例を見る思いがするのである。そのように、本書の中で著者によって語られる言葉は、まともに生きようとしている読者の心に沁み透り、己を振り返らせ、闇路を照らす光の様な働きをしようと言ってよいであろう。著者自身は、自分のことを凡庸な一教師に過ぎぬと謙遜されるのではあるが。

(4)

書物との出会いも大きな体験である。それについて著者は、椋鳩十氏の言う、「本を読んで感じて考える」ことが大切であり、「感動は人生の窓を開く」という提唱に賛同し、感じて考えるという感動を通して「精神が発酵する」のであるという。そして子どもたちにあっては、黙読より声に出して読む朗読を勧める。心と体をあげて本と真向かい、言葉を心と体に沁み入らせるのである。

この声に出して読み上げるという問題を巡っては、本書の『風立ちぬ』と題する章において、さまざまな場面で言葉の感覚を研ぐ、有効な方法として述べられている。昔の寺小屋で為された、繰り返し繰り返し音読させる教授法、それは文字に表された言葉との、もう一つの出会いの形であり、作家谷崎潤一郎も推奨する、言葉が「精神の奥深くに静かに沈潜し、熟成していく」方途になるのである。濱里さんは、俳句、短歌、文学、さらには役所での作文にまで及んで、音読の効果を説いている。濱里さんと昵懇の俳人金子兜太氏は「ぼくの体が五七五だ」とよく口にされるそうだが、まさに俳句も単に頭で作るのではなく、全身身の働きから生まれるものなのである。俳句では朗吟、短歌では朗詠が本来その出発点にあったというのも同じ所以である。

(5)

濱里さんの思想の基軸をなすもう一つの特色は「中庸」という思考法である。ものの見方にとどまらず、人としての生き方、教育のあり方に関わる思考法であるが、前回の『斜光の風景』の書評でも記したことなので、ここでは一点にのみ絞って述べることにしたい。

単純化して学校教育を見れば、「ゆとり主義」と「詰め込み主義」の二つが、つねに対立的な方法として論議されてきた。最近の大学生の学

力が低いのは、それまでに受けた「ゆとりの教育」に原因があるなどと巷間よく話題になる。だが本当にそうであろうか。私見であるが、私はかつてアメリカの小学校で、日本の生活科や総合科目に当たる、或る教育計画を長時間見学したことがある。そこで知ったのは、生徒を見る目、それに対応する課題の組み立て、どのような生徒の質問にも応えうる力、構想力等々にわたる教師の力量に、並々ならぬものがあるということであった。従ってその教師を養成する特別の講習会が、実践の前提として行われるのである。学力不振とされたきた子どもたちが、その中で大きく力を伸ばしていく。日本で当時なされていた「ゆとり教育」の一面と、形は似ていても質的に非常に異なる姿がそこにあった。

濱里さんは、極端に走ると落とし穴があり、「ゆとり」は「ゆるみ」になり、「詰め込み」は「人間性をそこね、創造性を育てない」という。「過度と不足は同じ過ちであり、〈中〉（まん中）こそが最も高い価値なのだ」と教えたのは中庸の思想です」と彼は語り、弓で的を射て、「的中」するとはこのことをさす、と至言とも言える言葉を記している。弓の例で「的中」がいかに難しく、弛まざる鍛錬を要するわざであるか理解出来るであろう。これは教育に限らず、人生の万般に通じる教えとして、中道（中庸）をゆくことが、高い価値をもつとされる所以である。

本著には、以上のほかにも、人は幾つになってもまだ出会わぬ「未見の我」があるという問題。大病のような逆境が人間を育てるという事実。人や万物と相つながる「縁（えにし）」によって「生かされている我」の自覚など、人間として深く味わうべき問題が多々語られるのであるが、既に述べる紙数は尽きてしまった。

最後に、「出会いとは自己の中に他者が生きつづけること」という、著者の珠玉の言葉を記憶にとどめたい。私も、そしてきっと多くの方々も、まさにこの言葉の意味において、濱里さんに「出会い」えたのであると明言し、筆をおくことにしたい。

（奈良女子大学名誉教授）